



西眼科だより 第10巻1号

(季刊誌)

2008年1月発行

編集責任者：倉橋美雪

Nishi Eye Hospital

西眼科病院 〒537-0025 大阪府大阪市東成区中道 4-14-26 TEL: 06-6981-1132

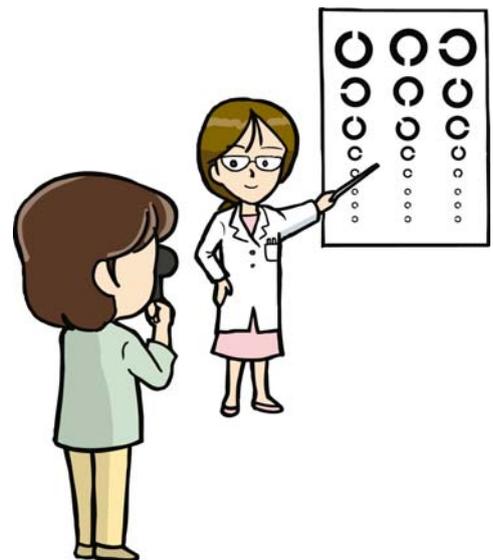
〈ホームページ〉<http://www.nishi-ganka.or.jp> 〈e-mail〉office@nishi-ganka.or.jp

検査の必要性

「前回、測ったのに・・・なぜ毎回同じような検査をするのですか?」、「眼圧とは?視野とは?なんですか?」「どのような検査なのですか?」等の疑問をお持ちの方に、今回は視力・眼圧・視野検査等について簡単に説明致します。

①視力検査

眼の持つ能力のことをいい、眼科で行う検査の基本です。裸眼視力のみでなく、その人、個人個人の持つ本来の視力を矯正視力によって測定します。診察毎に、その日の視力を測り、疾病の早期発見や屈折異常(遠視・近視・乱視)の有無、また治療の効果を見るのに有用です。



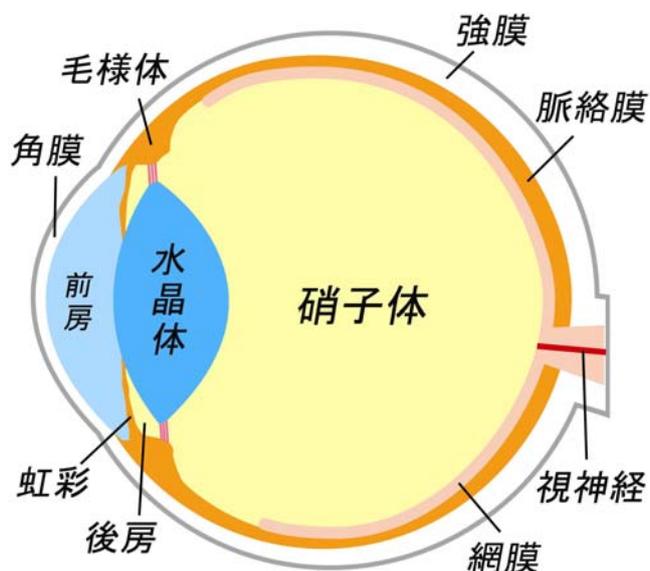
②眼圧検査

眼圧とは「眼球の硬さ」のことで、大切な検査の一つです。眼圧は眼の中で作られる水の量と、眼の外へ出て行く水の量によって決まります。何らかの原因で眼の中に水が溜まって眼圧の上昇が続くと、眼球壁が圧迫され、萎縮します。視野を測定すると、どの程度萎縮しているかが判ります。眼圧の正常値は「視神経に障害をおこさない値」をいい、体温にも個人差があるように、個人個人によって異なります。また、眼圧は変動しますので、時間をおいて繰り返し測定する必要があります。

③視野検査

眼圧検査で「緑内障」と疑われた場合、緑内障による視神経のダメージが

進んでいないかどうかの確認を視野検査で行います。この検査は「一点を見た状態で、どのくらいの範囲の光が見えているか、見えにくい部分はないか」を調べる検査です。20分ほどかかり、集中力を求められますが、痛くはありません。緑内障は自覚症状が極めて出にくく、この検査を行う事により早期の変化や末期の進行の程度が確認できます。最近では、早期発見に伴い緑内障で失明する事は殆どありません。また病状を進行させない為にも原則として視野検査を定期的に続けていく必要があります。



④眼底検査

眼底検査とは、点眼薬を使って瞳孔(瞳)を大きく広げ、眼球内の水晶体や網膜、視神経乳頭等を詳しく調べる検査です。検査には検眼鏡、細隙灯顕微鏡、眼底カメラ等を使用します。瞳孔は眼の中に入る光の量を調節する働きがあり、普段は明るさに応じて小さくなっています。そのままだと、眼球の隅々まで観察することができないので、「散瞳剤」と言われる薬を点眼して瞳を大きく広げます。薬が効いている間は瞳が大きくなっているので、物がぼやけたり、光を普段より眩しく感じたりしますが、約4~5時間で薬の効果はなくなります(瞳を広げて行う検査には他に、OCT・眼底写真・乳頭撮影・網膜電図等があります)。眼底検査を行うことで、眼底出血、網膜剥離、乳頭浮腫、視神経萎縮、糖尿病網膜症等の早期発見につながります。

⑤OCT: Optical Coherence Tomography (光干渉断層計)

OCTとは網膜の断層写真を撮影する検査です。より正確に網膜の状態を知ることができ、治療効果を確認することができます。網膜は、十層の層からできており、OCTにより、奥の層まで観察可能です。弱い赤外線を眼底にあて、その組織からの反射波を解析し、網膜の断層を画像化します。器械が直接眼に触れることもなく、数分で終了しますので、眼の負担が少ない検査です。OCTを必要とする代表的な疾患には、加齢黄斑変性症、黄斑浮腫、黄斑円孔・緑内障等があげられます。